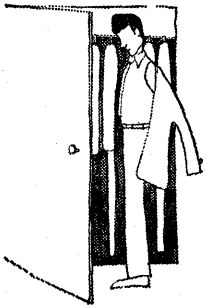
なぜ「みんなといっしょ」なのか

——望ましい幼児教育への問い——

伊藤　隆二



いじめられっ子——なぜならば

日本人論が盛んである。外国人のみならず、日本人による日本人論も、少なからずある。いろいろな人が日本人を語っていくと、さまざまな角度からアプローチしているにもかかわらず、最後には、日本人は、単一民族だから、ものの見方も考え方も、また実際の行動も「一様である」という結論にゆきつく。

小さいときから、そんなことをしたらみっともないとか、そんなことをいったらわらわれるとか、ちゃんとしなければ変な子だといわれる、といったしつけをうけて育つ日本の子どもたちは、次第に人の目を気にするようになる。自分はみんなと同じことをしているか、みんな

と同じ見方をしているか、同じ考え方をしているか、といったことを心配するようになる。

仲間を見るときも、だれそれは変なことを言っているとか、変な恰好をしているとか、変なクセがあるといったことを問題にする。

自分がそうであるように、仲間にもみんなといっしょ（同じ）であることを期待する。そして、少しでもみんなと違うことをしていると、仲間はずれにしようとする。

そうした日本人の悪弊が、今、子どもの世界にも登場し、「変った子ども」が苦しんでいる。〃いじめられっ子〃と呼ばれている子どもたちである。

〃いじめ〃現象は、早い場合は三、四歳の幼児にもあらわれている。多いのは小・中学生時代である。そのこまかな実態について述べる余裕はないが、〃いじめられっ子〃になりやすい子どもには、いくつかの共通項があることを指摘したい。「おとなしい」「覇気がない」「お人好しである」「涙もろい」「気が弱い」「性格が暗い」「動作が鈍い」「不器用である」「身体面に欠点がある（髪の毛が縮れている、毛に色がついている、毛が薄い、からだが太っている、背が低い、体力がない、機能の面でも不自由なところがある、何か病気がある、からだが臭い……）」「精神面に弱い面がある（知恵づきが遅い、頭の回転がにぶい、言葉に問題がある――赤ちゃん言葉、言葉遅れ、無口、どもり……、変ったクセがある）」「保護者が貧しい、社会的地位（身分）が低い、社会的評判がよくない」など。

もちろん、これらの項目が一人の子どもにすべてはまるというわけではない。ほんの数個が当てはまるだけであるということもある。また、項目によっては矛盾しているものもあるかもしれない。そうしたこまかな詮索は、ここではやめるとして、全体を通して、どういう子どもかが想像できればそれでよいだろう。

一語で言えば、われわれが常識的にもっている「平均的な」あるいは「標準的な」子どもから、下位の方へ逸脱しているとき、〃いじめ〃の対象（いじめられっ子）になりやすいということである。

人の目を意識するということ

子どもは感受性が鋭いとか、ものごとに敏感だと、いわれている。そのことの真偽は問わないとしても、子どもの〝いじめられっ子〟を探し出す能力が、じつに的確であるのには驚かされる。いじめっ子は自分よりも強いもの、あるいは「標準」より上位のものを見事に峻別し、決して手を出さない。怖いからでもあるし、面白くないからでもある。

では、かれらは自分より強いものや「標準」よりも上位にあるものを尊敬しているかというと、そうでもない。自分はどうせかなわない、といった羨望もあるにはあるが、むしろはじめからかかわりをもたないという場合が多いようだ。

では、子どもの〝いじめられっ子〟を探し出す能力は先天的なものかといえば、もちろんそうではない。子どもがあらかじめ、そういう能力をもって生まれてくるとは考えられない。

あとから身につけたものである。おとな（それは育ててくれた保護者であろうし、保育してくれた指導者でもあろう）がしていることを見ているうちに、意図することなく、学んでしまったものである。

子どもにかかわりあうそのおとなたちが「平均」とか「標準」という目で他者を見、そして「平均」ないしは「標準」的な行動をすることに意を注ぎ、そして他者から「変な人間」とみられない行動を、実際にしてきたのである。そして仲間に少しでも「変った人間」がいると、軽蔑の目を注ぎ、また酒のサカナにして話の華を咲かせ、ときには除けものにしてきたのである。

こうしたおとなの意識や行動が「規範」となり、身近にいる小さな子どもに決定的な影響を及ぼしてきた、というのが私の考察である。

もう少し、こまかく見ていくと、こうである。今のおとながかつて子どもであったとき、親からは「一様である」ことを期待されていた。幼稚園でも小学校でも制服

を身にまとい、教師からは同じ教室で、同じように指導をうけ、人並みに学力をのばし、人並みに上の学校にあがっていった。上級学校では、その人なりに、ある程度は好きな勉学をしたのかもしれないが、同じように卒業し、人並みにサラリーマンかOLになったのだろう。入社したときは、みな頭髪を七分三分に分け、紺色の背広に白いワイシャツを着、赤いネクタイをしめていた。女性ならば流行の髪型にし、白いブラウスを着、紫色のスカートをはいていた。成人式や卒業式では、みな一様に華やかな振り袖姿であった。男性は二七歳前後に、女性は二四歳前後に結婚することを望んだ。そして人並みのつれ合いを得、〇〇会館の型通りの結婚式をあげ、そして画一された（見ようによっては蜂の巣に似た）アパートの一室で新婚生活をおくり、子どもを平均二人、もうけたのである。やる気の旺盛な人の場合は栄達をめざして、がむしゃらに頑張って人よりも早く昇進したのだろうが、ほとんど大半は人並みに地位があがり、人並みに暮らせればそれでよいと、観念していた。そういう人は「変った人間だ」と言われることをもっとも忌み嫌った。「大過なし」がモットーであった。上司から指示されたことはするが、余計なことはしない。着るものも、話すことばも、態度も平均的であることを望んだ。人から仲間はずれにされることをもっとも警戒した。そのためにはつき合いをよくした。人と変ったことをやるまいと、神経をつかった。自分の子どもたちには「みっともない」とか「人にわらわれるぞ」とたえず注意し、人の目を意識させる育て方をしていった……。

「標準」優先の幼児教育

一方、子どもをうけいれた保育園や幼稚園ではどうであったか。

最近、子どもの発達研究が非常に盛んである。子どもが生後何ヵ月になったら何ができるようになる、何歳になったらこんなことをするようになる、といったことが「標準化」されるようになった。それによって「標準発

達検査」もつくられている。

育児書も氾濫している。そのどのページをひらいてみても「標準」が幅をきかせている。附録には「月別発達表」から、最近では「週別発達表」までついている。生後何ヵ月の赤ちゃんは一日何回、どれだけのミルクを飲むか、体重はどうふえるか、日光浴は何時間やるべきか、風呂には何回入れるべきか、さらに離乳はいつ始めるか、そのときは何をどのくらい与えるべきか、排泄の習慣は何歳何ヵ月から何ヵ月の間にきちんとつけておかないと、あとでダメになる……といったことが微に入り細をうがって書かれている。

母親代わりに子どもを育てる役をになっている保育園や幼稚園の保母・教諭たちはこうした「標準」にもとづいて子どもをしつけていくことになるだろう。そういえば、いつの頃からか保育・教育の世界では、発達段階に応じた保育・教育とか、発達に即した保育・教育といった表現が多くとられるようになってきている。

発達研究が子どもの発達の「標準」を求めるものに収斂していくとき、その結果にもとづいておこなわれる保育・教育は、子どもをも「標準」にはめこんでいくことは避けられない。

げんに保育園や幼稚園では、一定のカリキュラムを用意していることが多い。子どもの発達のすじ道はこうなのだから、それに即していつ何をどのように指導していくか、その結果はどうなるかといったことまであらかじめ、きちんときめておいて、どの子どももその固定した枠の中にはめこんでいく。

しかも、なお困ることに、昨今、世の中は「早いもの勝ち」という風潮がいたるところにゆきわたっているためか、保育園や幼稚園でも指導者は子どもたちに「早く、早く」を連発し、急がせている。

なぜそんなに急がせる必要があるのかというと、あらかじめきめられている型に、人よりも早くはまりこむと〝勝利者〟になれるという観念が指導者の頭の中にあるからにちがいない。小学校でも中学校でも、事態は深刻である。教師があらかじめ用意している答を早くあてる

ことのできる子どもが「よい子」であり、〃勝利者〃だと評価されるので、子ども同士はしのぎを削ることになる。

そこでも教師は「早く、早く」が口ぐせになっている。「よい子」とは標準通りか、標準を上まわる地点に早く到達したもののことである。逆に、のんびりとマイペースで、しかも標準とはちがった方向へ歩んでいく子どもがいると〃変った子ども〃だと非難されることになる。指導者たちはそんなことをしていると〃勝利者〃になれないといって、叱る。仲間たちは、あいつは〃いじめ〃甲斐がある、とみる。とくにグループ単位で〃競争〃をしている場合は、グループのメンバーが、その「変った子ども」を除けものにしようとする。その子どものために自分たちのグループが勝てないからである。

人生は選択の連続である

人間とは何か。人間が他の生きものとちがう点は数多くあるだろうが、その一つはひとりひとりが独自的だという点である。他の生きものは、蝶であれ蟻であれ、犬や猫であっても、そのもってうまれた本能ないしは反射機構に、ほとんど完全に拘束されている。一定の刺激が与えられれば直ちに一定の反応をする、というように刺激・反応の関係は一様である。つまり型通りである。したがって、その生きものの一匹一匹に大きなちがいがない。

しかし、人間は新生児や乳児の早い時期には刺激・反応の関係は固定的ではあるが、少し長すぎると、刺激・反応との間、その反応の仕方、また自発的な刺激の探究、刺激そのものの創造……といった点でその子らしさ（独自性）がみられるようになってくる。とくに幼児期にもなれば、刺激（人間の場合は問い）への応じ方（応答、活動）には、それぞれの子どものユニークさが目立つようになる。もっともユニークな子どもは、問いと答えの間（ま）が潤沢である。

他の生きものは刺激・反応の関係は短絡的であり、か

つ一直線につながっていて、固定的であるが、人間の場合は、問いを咀嚼し、吟味し、自分であれこれと思考し、そして最後に選択して、応答する。その選択するところに人間としての価値があるのであり、またその選択の仕方にその人らしさが反映する。さらに選択するという自発的・主体的な行為を通して自己が創造されていく。当然、迷うこともある。悩むこともある。また選択したことが失敗である場合もある。そうした迷いや悩みや失敗することが人間だけのものなのである。そういう悲哀を経験することで人間は自己の人生をきりひらいていけるのである。

人間の歴史は、さらに敷衍すれば、アミーバから人類までの進化とは、選択した知恵が連綿と継承されつつ蓄積され、そして現代人の頭脳形成のもとになっていった、その過程であったといえる。今人間がさまざまの問いに直面し、正しい答えを選択していけるのは、気の遠くなるような過去の知恵の蓄積があったからである。

そうであるならば、人間の子どももさまざまに思考し、発想し、そして自由に選択していくところに大きな意味をもつとはいえないだろうか。

おとな——子どもからみれば一世代古い人間——があらかじめきめた標準に、みずみずしい頭脳をもっている子どもたちをはめこんでいくだけならば、もはや進歩はない。それどころか一定の問いにたいして、早く一定の答えを（反射的に）出せるような指導を強いているならば、人間の子どもは蝶や蟻のレベルに退行していくだろう。なぜなら子どもは問いを咀嚼し、吟味し、自分であれこれと思考し、選択するという余裕もなく、あの「刺激・反応」という固定した、型通りの行動しかできなくなるからである。

望ましい幼児教育への問い

幼児の絵本を見て、驚くことがある。さまざまなもの、例えば果物とか、身近な動物とかの絵が描かれている、そのページの隅に「このなかから、なかまはずれ

をさがしましょう」と書かれているのである。

なるほどよくみると、それらのもののなかで異質のものが一つか二つまじっている。果物のなかに大根がはいっていたり、茄子がはいっていたりする。〃果物〃という概念を学習させることが目的であるのだから、子どもたちに大根や茄子はちがうことに気づかせるのは、何もわるいことではない。しかし、〃なかまはずれ〃という表現はどうもいただけない。

男の子が九人、女の子が一人いる集団をさして指導者が子どもに「このなかからなかまはずれをさがしましょう」と問うだろうか。もし問われた子どもがその女の子を指したならば、事態はどうなるだろうか。人間差別もはなはだしいということで、指導者も子どもも糾弾されるのではなかろうか。

しかし、現実では、それに類似した差別が横行しているのである。ある幼稚園に自閉傾向のある子どもが入園してきたことがあった。その幼稚園ではグループ別保育をやっていたのであるが、どのグループの子どもも、その障害児を仲間に入れなかったのだ。彼は仲間はずれにされたのである。

同じ子どもであるのに、動作がのろいとか、言葉で表現する力が弱いということで、その子どもは「変った子ども」というレッテルを貼られて、仲間から追放されるというのは、現代版の魔女狩りではないか。

「変った子ども」が仲間はずれにされるのは可哀相だという理由で、指導者は何がなんでも「標準」に近づけようとして、子どもに無理な訓練をおこなうことが多い。しかし、所詮その「標準」通りにはならない。その子どもにはその子どもの生き方があるのだから。その独自性を尊重することが真の子ども尊重なのである。

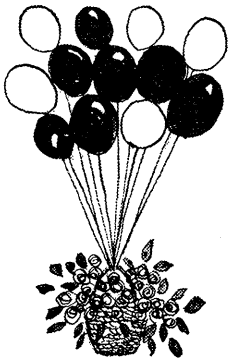
しかし、みんなと変っているところがあるというだけで仲間はずれにし、ときには〃いじめ〃の対象とする——そういう今の子どもの世界のおかしさを多くのおとなは、それほど重大視していないようだ。それはおとなの世界でも、同じようなことが数多くあるからだろう。それどころか、わが子に「みんなと同じようにしなさい」

と命令している親たちの心のうちには、もしみんなついていけなかったり、みんなとちがうことをやったならば仲間はずれにされてしまうという懸念がつきまとっているのである。

わが子が人並みに上の学校を出、サラリーマンやOLになり、早く結婚し……ということを願っている親のもとで、じつは確実にその子どもの独自性は抹殺されているのである。子どもは何のためにこの世に生を享けたのか、自分の役割は何かといった根源的な問いに立ちむかうことがない。したがって、人類の理想も描けない。独自性という天分を捨てて、「みんな」という標準に自分をはめこもうとするだけだ。

その行動は現実的・実利的である。「刺激・反応」のワン・パターンで、ただただあくせくと自分だけのために生きていくだけである。

そういう標準型サラリーマン・OLの養成を早くも保育園や幼稚園がうけおっている。

なぜ「みんなといっしょ」でなければならないのか——私はこの問いを幼児教育関係者に投げかけたい。どうぞじっくりと間（ま）をとり、咀嚼し、吟味し、思考し、そして正しい答えを選択していただきたい。

（横浜市立大学）